

一九三〇年代の恐怖の持続

講師 鶴見俊輔

「思想史の中で自分の嫌いなものに出会ったらどうするんですか」と私は丸山さんに訊いたことがあるんです。これは、あの、もう晩年ですね。そうすると、「山崎闇齋と闇齋学派」を書いている時に吐き気が続いて止まらないので救急車を呼んで入院したことがあるという答えでした。で、この論文は非常に優れた論文で丸山さんの一代のもう代表的な作品だと思いますけれども、膨大なものを山崎闇齋の著作と山崎闇齋の弟子の著作をずーっと読んでいかれたものなんです。で、読んでいる内に、読者である丸山眞男の中に自分が通り抜けた一九三〇年代の不快感が呼び覚まされたんです。大正時代の自由主義・民本主義の流れの中で、その流れの代表者の一人である新聞記者丸山幹治の息子として育ち、丸山幹治の同僚の新聞記者で行動を共にした長谷川如是閑と中学生の時から往き来していた。そして、お兄さんの丸山鐵雄は丁度滝川事件の弾圧があった時の京都大学の学生だったんですね。で、「ここはお国を何百里」という長い長い替え歌があるんですが、

それを作った人なんです。つまり、潰されていく大学の自由というものに対する挽歌なんです。これを歌えるんですよ。で、恐らく歌われたんだと思います。京都で、その丸山鐵雄さんに対する、ま、これ四つ上なんです。丸山眞男さんよりも、共感をもって中学生の時代にあっただけでしょう。中学生から一高に入りますよ。そうすると、旧知である長谷川如是閑に何日に唯物論研究会の発会式があって色んな人が話をするから来ないかと誘われて一高に入ったばかりの時にいったんです。ね。(註1) そうしたら、そこに、警察が入ってきて、捕まっちゃったんですよ。で、留置場、ですね。これは、まあ、十七・八の少年にとっては大変なショックですね。真っ暗ですよ、それは。一度入った時と二度入った時と印象が全然違うんですよ。初めて捕まっちゃった時は相当驚きますよ。二度以後はあんまり驚きません。で、この最初の時のショックというものは大変なものだと思います。生涯続いたと思います。で、一高は除籍しなかったんですよ。

他の人の場合、裁判も何もなしに除籍しちゃうんですよ、高校は。ま、一高は高校の中ではいささか文化的だったんですね。除籍は免れて学校に行くようになったけれども恐怖は去らなかつたと思います。一遍捕まった人間は後々までマークされてますから、東大に入っても助手になっても、その恐怖は去らなかつた。助手の間に、最初の一冊を書き上げてからすぐに、陸軍にとられた(註2)。応召するんですが、その後も恐怖は去らなかつた。恐怖が去つたのは敗戦の時だと思います。それまで持続があつた。これが、丸山さんの学問にとつて大変に重大な役割を果たしていると思います。で、東大の法学部の助手になって、やがて、東洋政治思想史を担当する予定になっていて、助手の間は講義を受け持つことは出来ないの、外から人に頼んで講義してもらつたんですね。東北大学の村岡典嗣とか、それから早稲田の津田左右吉ですね。で、津田さんと呼んだ時、津田左右吉は既に右翼からの脅迫をずっと受けているんです。最後は、『学生と歴史』の中で津田さんの論文は、真っ白になっているんですね。本の中に白いページがあるんですよ。これは驚いた。で、まあ、津田左右吉の意見で、その論文、刷り上つたやつを取っちゃつたんですね。で、まあ、津田左右吉が丸山さんに頼まれて(註3)東大に講義に来た時は、既に東大の空気が変わつていたんですよ。文学部の国史を担当していた平泉澄という人が非常に人気が出てきて、平泉澄を良いと思う学生が講義の部屋になり多数いたんですよ。それで、津田さんの講義に対して大変に反対の声をあげたんです。で、津田さんと呼んできた責任者である丸山さ

んは(註3)、助手として来たんだけど、怒つちゃつてね、怒鳴つたんだそうですね。そして、津田さんが、「いや、もうこういう時勢になつたんだから」と却つてなだめてくれたそうですね。それは、津田さんの講義が終わると前の電車道までずっと歩くんですがね、つまり、自動車で帰るとかそういうことはないですよ、その間に、津田さんが慰めてくれたと言われてましたねえ。こういう時代の恐怖、東大の中にあつてさえ、ただ不愉快というのではなくて恐怖感があるような大学だったんです。でも、その恐怖感を向こうに回して戦中丸山さんは書きつづけたんですね。で、戦後に、初期の初期に書かれたものが「陸羯南」というエッセイなんです。これ、『中央公論』です。これはね、陸羯南っていう人は、そう、『坂の上の雲』に出てきます。正岡子規に最後まで書く場所を与えた人ですね。一八五七年に生まれて、一九〇七年、日露戦争から二年経つて亡くなっています。で、この陸羯南の評伝を丸山さんはエッセイとして書いて、「明治初期の日本主義」というものは海外の考え方を受け入れる一つの主体だった。海外の思想を排除することを目的とする昭和の時代の日本主義とははっきり違つたものだった。で、これは、敗戦を機会として、それまで自分が身に纏つていた軍国主義の衣をさらりと投げ捨てて、さらりと投げ捨てる、脱ぎ捨てるという言葉となんか潔いようですが、何でもあるんですね、そういうことは。そして、新しい装いを纏つたこの戦後同時代の日本の知識人についての絶望に、このエッセイは、裏打ちされていると思えます。だから、今から見ても、何だこんな生ぬるいことを書いていたのか、

なんて考え方を持つ、そういう読書っていうのは、読書術としてはあまり優れたものとは思えませんね。敗戦直後に、丸山さんは、進歩的知識人というものからはかなりかけ離れた存在だったということ、つまり、戦中の気分が丸山さんの中に持続していたということが重要だと思います。で、この、前の時代の自分を容易く脱ぎ捨てないということが丸山眞男の方法の特色になった。この場合の、丸山眞男のメタ・メソッドというのはとても重要だと思います。それぞれの人がメソッドとメタ・メソッドを持っていて、その関係で見るということはとても重要なことだと思います。自分のメタ・メソッドそのものだけでぐーっと突っ走っちゃう、そういう書き方をする人もいますが、丸山さんはそういう書き方が好きではなかったですね。極めて批判的でした。そのメタ・メソッドとメソッドとがすごく軌み合ってますね。それが、どういうふうにもそこで、丸山眞男の方法を見ていく、文体を見ていくことが良いのじゃないかと思えます。メタ・メソッドなしでメソッドを作っていくというのは極めて危険なことで、あの、輸入的な学問になっていきますね。メタ・メソッドは必要です。メタ・メソッドだけで押していくのはある文体を作りますが、これじゃあ、丸山さんの言葉で言えば、文学であって社会科学の一部ではない。丸山さんが繰り返して言うのは、自分は自分の仕事を社会科学の縁にいると思っている。社会科学の中にあると思っている。その外に出て文学だけになってしまっているじゃないかということは、しばしば、批判の方法として、丸山眞男の批判の方法として、使われていますね。も

う一つ、丸山さんが、統計的に同時代の日本の知識人に対して、この型になっていると言われるのは、思い出しの論理なんです。今都合の良いこと全部自分の過去から思い出して、そこに立って話しちゃうんだ。まさに敗戦後の日本の学者社会、論壇はそういうものだったんです。つまり、大体、大正時代の時にもう一人前になっている人達ですからねえ。その頃は、結構、民本主義とか自由主義とか言ってたんですよ。その気分に戻っちゃって、こう、自分もかつては民本主義者だった、自由主義者だった、それは事実ですよ。そのところからどんどん繰り出していくんですね。で、その後、屈服したところは括弧に入れちゃうんです。で、必要なところだけ思い出して話を進めるわけですね。事実は事実なんだけれども、そういうことは極めてまずいと、下劣だと、これは丸山さんのメタ・メソッドの部分が感じられます。「陸羯南」は、その意味で大変重大な、戦後初期の丸山さんの仕事ですね。

そこに至るまでに戦中の丸山さんの仕事がありまして、偶然、私の姉が丸山さんの研究室に出入りしていたものですから、そのついで、私は、昭和十九年に『国家学会雑誌』に出ていた「自然と作為」ですね、続き物をずっと続けて完成まで読んでいたんですよ。それは、自然によって作られる政治ではなくて、フィクションとして作られる政治の王道がある、これは、荻生徂徠の論文の中に現れている、つまり、自然そのものじゃない、自分がフィクションとして打ち立てるもの。それは、丸山さんが既に南原繁さんの影響で読んでいたカントが倫理

の規範として立てているもの、これは自然の流れと違うわけですから、そういうものと響き合うものとして、その作為・フィクションがあるわけで、そのフィクションの意味が先王の道、聖人の道なんですね。これを取り上げて荻生徂徠を分析しているわけです。

さて、この同時代に、共産党もまた思い出しの論理に陥っているんですよ。それは、獄中十八年、大変な状況の中で、屈せず、投獄以前の自分の規範を守り抜いた人達にとつて無理からぬことでしょう。外の状況を何らかの意味で察して、状況に弾力的に反応しろといっても、無いものねだりであつたかもしれません。そこですね。偉大な非転向、それをどう見るかという問題です。私はその頃、『中央公論』に「知識人の戦争責任」というエッセイを書いているんです。これに対して、すぐに丸山さんは反応して、岩波の『思想』に自分の名前を伏せ、また攻撃の対象である私の名前を伏せ、見開きの短い批評を書いているんです(註4)。で、それはね、戦争中に政府の立てた軍国主義の考え方に屈しなかつた非転向を偉大と見る、だけどそれは、日本と世界の状況を見ることが出来なかつたという裏を持っているので、政治は常に結果判断でなければいけない。結果を見て。だから、一つの政治運動として、たとえ獄中にあつたとしても、反戦という目的に向かつて民衆との協力の体制を構想し得なかつた共産党の責任は免れ得ない。これを非転向だけの理由で褒め称えるならば、それは、大正期以来、小学校の修身の教科書に出てきた「木口小平は死んでもラツパを放しませんでした」ということと同じではないか。この喩えはね、共産党

幹部、非転向の共産党幹部にはグサツと刺さつたんですよ。この喩えの力、ね、丸山さんの論文は一種の文学としての力を持っているんですよ。また、政治的にも打撃を与えているんですよ。これ、見開きなんですけれどもね。私はそれを読んで、これは、私個人の著作に対する真つ向からの批判と考えました。それは、突き一本つていう感じですねえ、道場の真中へバーンと突きを入れてパターンとぶつ倒れているような感じですね。私はそのように受け取りました。だから、私は丸山さんのこの批判に完全に屈しているんですよ。にもかかわらず、共産党は怒つちやつたんですよ。木口小平に喩えられたから。この野郎つて。それまで非常に丸山さんに対する評価は高かつたのがぐるつとひっくり返つちやつたですね。後はもう憎み続けるんですよ。ところが、私は、丸山さんに突き一本入れられる：『中央公論』だけしか見ませんからね、対象が私であることが良く見えなかつたんでしょう。私はそれからしばらく共産党から評判良くなつたんですよ。いや、敗戦後はずーつと評判悪かつたんですよ。で、もう、何度も何度も批判されるし、いやあ、『前衛』で名指しに、つまり、これがあつた後です。私の名前をあげて論文で批判されることもありました。近頃また評判良くなっていますけれどもね。私はマルクス主義とは無関係です。勿論、共産党とも無関係。評判の良い悪いは、もう全然私の関知するところではありません。だけど、常に戦争に反対だから、共産党も戦争に反対ですから、頼まれれば出てますよ、だけど、それは、マルキシズムとは関係ないんです。で、こういう風に、私の名前を伏せ、自

分の名前を伏せ、しかし、論理としては容赦なく突き一本という感じ、これはやっぱりすごいですね。私はそんなに戦後、戦後もう六十年経っています、完膚なきまでにやられたという経験を持っていません。はつきり三度、或いは五度位ですね。

で、戦争中のことを私に知って欲しいと思われたんですね。あの、戦後の古い家を訪ねた時、渋谷にあった(註5)、書庫から自分の戦争中の古い論文を出してきて、これ読んでくれと言われたので、私は、そのまま、座ったまま、そこで読んだんです。という、随分その頃丸山さん、暇だったんですね。やっぱり戦後ってそういうものなんです。そんなに人は訪ねてきていませんでしたね。で、その論文は、読んでもらいたいと言って私に持ってこられたものはね、一つは、麻生義輝の著の『近世日本哲学史』の書評なんです。で、この大西祝はじめというところでね、大西祝って明治の、最初に京都大学、京都文科大学の学長に擬せられた人で、結核で亡くなったので、初代学長は狩野亨吉になるんですが、大西祝ってね、カント譲りの論理なので、カント譲りっていうことは、何が正しいかっていう問題は全く垂直にくるので、この地上のことがどういう風になっていくということとは独立的なんだ。だから、歴史がどういう風に動いていくかということを中心に組み立てるものは、つまりヘーゲルですね、そういう方向に流れていくものに対してははつきり対立し続ける。で、この立場を、大西祝はとり続けたんですね。だから、ヘーゲルからずっと来て、ヘーゲルが一番新しい、最先端の哲学だっていうことになって、これか

ら結局戦中流行の『世界史の哲学』まで行くんですが、これを裁断する別の立場を明治に大西祝は立てている。で、その点を戦争中に書かれた書評ではつきり指摘しているんです。もう一つは、『神皇正統記』の批評なんです。で、『神皇正統記』を戦争中に取り上げて何か解説するっていうのは、戦争中は、ちよつとこれ危ない橋を渡っていますよ。普通、戦争中にその解説をするとしたら随分違ったこと言うようになると思うんです。だけど、丸山さんは『神皇正統記』そのものから意外なところを引いているんです。正統の王権と言えども、つまり天皇ですね、人民のことを考えないで、人民の利益から離反すれば当然に衰える。だから、正統の南朝、つまり北畠派ですね、は当然の報いとして衰えているんだという説があるんです。普通、そんなこと、『神皇正統記』を読んでもそこを読みません。で、この引用の仕方が素晴らしいんですね。しかも、戦中、つまり、一億玉碎して国体を守れとか、天皇の王朝は万世一系だからどんなことがあっても負けることはないとか、そういう流れの中でその一節を抜いているんです。だから、この引用の仕方が素晴らしいんです。で、引用なんてね、沢山本読めばほとんど引用できると思って：まあ、私は、大学と無関係だからそういう風に大学の悪口が言えるんですが。あの、引用つてのを見ると、大体力の段位が分かりますよ。読んだ本みんな註に書きちゃう人いるんだから。丸山さんは読んだ本全部註に入れてません。それは、橋川文三が教えてくれたんだ。これは、返り忠かもしれないなあ。あの、私と会ったのは戦後なんです。でも、私のしゃべることが何が

なんだかさっぱり分からないので、理解するためにG・H・ミードを図書館から借り出してきて一生懸命読んでいたよ、これは、橋川さんの私への通報なんだけれども。だけど、G・H・ミードなんてほとんど出てこないでしょ。フロイトもユングも出てきませんね。丸山さんの勉強の仕方ってそういうものなんです。引用っていうのは、実際は、どこを引用するかっていうことで、もう、実は学力っていうものを示しているんですよ。そういうこと分からないで沢山読むもの読めば、注入れば認めてもらえらると思ってる浅はかなる学徒が多いです。

で、もう一つ、丸山さんは、同時代報道への高い評価があったんです。何故、同時代報道っていう変な言葉を使うかっていうと、ラジオが含まれているから。既に。つまり、丸山さんが師事した長谷川如是閑っていう人は、ラジオ文化批判のもう先駆者なんです。大変面白い。つまり、原型芸術と複製芸術って区別をね、今の大学だったらベンヤミンから始まったように考えるでしょう。そうじゃないんです。ベンヤミンよりもっと早く長谷川如是閑にあるんですよ。つまり、複製芸術だけに注意して心を奪われると、元にある原型芸術が衰えていくって言うんですよ。あの、氏神さんのお祭りとか太鼓とかああいうものが原型芸術なんです。複製芸術は、ラジオ、映画、そういうもの。そういうところに如是閑は注目していたんです。ですから、如是閑と付き合いがあった丸山さんは早くから注目しているんですよ。つまり、ヘーゲルとカントだけ読んでた人じゃないんです。で、兄さんの丸山鐵雄氏は流行歌が好きで替え歌まで作るんですから、後、NHKに入っ

て、非常に早く高い地位に上ってプロデューサーになるんですが、ところが、「ここはお国の何百里」で滝川事件の屈辱を風刺したくらいです。それから、戦後、「冗談音楽」っていう番組を作って支えたんだけど、それが占領軍の方針とぶつかって降ろされちゃうんですよ、結局。官僚としては具合悪いですね。その時、あの、電車の中の吊り広告を覚えていたけれども、「トリロー頑張れ、スーパになるな」っていうのが出てたね。これは、三木トリローが中心にいたから、頑張れっていうことですねえ。やっぱりそういう励ましは、プロデューサーである丸山鐵雄まで及んでたわけ。で、そういう気分をバックにしていた人で、丸山さんは何だラジオなんて低俗な、映画も下らないという人ではありません。映画はよく見ていた。中学生の頃から。大変な影響を受けたのは『カリガリ博士』です。これは丸山さんの論文の中に流れ込んできますよ。これは精神分析が含まれたものですね。戦争中の映画だって『暖流』なんて何度も見ていると思います。そういう人だったんです。だから、岩波と関係が深いから岩波文庫みたいな高級なものばかり読んでいたと思われるかもしれませんが、そうではありません。報道に高い理想を求めた。そのために現存の新聞記者っていうのは大体その理想から見えて落ちるから駄目なんです。だから、新聞にほとんど書いていないでしょ。新聞に出てくる場合にも「某政治学者は語った」。丸山さんに怒られたことがある。某って書くんですよ。新聞記者が。それは、言い換えれば、丸山幹治という父親の仕事に非常な敬意を持っていた。また、丸山鐵雄に対しても敬意を持っていたとい

うことと非常に深い関係があると思います。で、このことは、竹内好さんが亡くなった時の感想にも出てきますが、竹内さんって実に沢山の本を書いているんですけど、『北京日記』のを取り上げるんですよ。で、『北京日記』っていうのは無名の竹内さんが外務省の研究生として北京に渡ってた時の日記なんです。で、ほとんど毎日酒飲んで飲んだくれて酒場に通って恋愛で苦しんでですね。で、それに触れて、丸山さんは、「この日記のどこを見ても時局用語が流れ込んでない」って言うんです。目の付け所が非常に鋭い。「ジャーナリスト竹内好の誕生である」。つまり、その時の政府が出した色々なスローガンがあるでしょ。それを新聞が受け入れて色々な記事を作るでしょ。で、時局用語が出てるのが、竹内好の、それ政府から金もらってんですよ、『北京日記』には全然出ていない。で、そのことに竹内好の視点をみているんですね。で、この批評家としてすごく鋭いのと、つまり、報道・ジャーナリズムというのがどうであるべきかっていうことがそこにでてるんですよ、基準が。非常に基準が高いんですね。これはねえ、ある節度を守ってますね。

もっと若い人になるとね、それを踏み越えて、竹内論としてもっと入っちゃうんですよ。岡山麻子っていう人が書いた、去年（二〇〇二年六月）だったかな、『竹内好の文学精神』⁹⁾っていうのは、この人二十代の人なんだね、もっと踏み込んでるんです。つまり、その、竹内さんが恋愛で苦しんだ時の相手はね、竹内好が出会った初めて自分を等身大で受け入れてくれる人だったんだ、自分の家族なんかと違って。

そこまで入っていくんですが、丸山さんは入っていかないです。若い人っていうのは、まずく入っていく場合もあるけれども、この岡山麻子の場合には鋭いと思いましたね。あともう一つ、これは竹内さんについてだけでも、四方田犬彦が書いた子供向けの『魯迅』¹⁰⁾っていう本があるんですよ。これも竹内好が遠慮して書かなかったところまで踏み込んでいます。魯迅の暗さっていうのはね、うっかりしてお母さんの手に乗っちゃって、日本に留学中にお嫁さんもらっちゃうんですよ。で、そのお嫁さんが中国で魯迅の母親を世話してくれているんですよ。で、それでもその後、ずーっと家にいたんですよ。で、そのことを活写しているんです。その、魯迅が帰って行って、健康のために体操をしなきゃいけないという、纏足をしたその女性が体操をしているところまで四方田は書いていますね。こういうところまで、竹内好は魯迅に対する敬意から書けないんです。逆にわたしは、竹内好に対する敬意から、『竹内好』¹¹⁾っていう本を私は一冊書いているんですが、私の書いたものでは失敗作ですね。付き合いがあるから見事なものを書ける場合もあるでしょうが、私の場合はそうではありません。そうとすると、今日ここで話している丸山眞男に触れた講演そのもの、これも良い出来になるわけじゃないんですよ。ハッハッハッハ。だから、『丸山眞男』という本を一冊書くとしたら、『竹内好』という本と同じように失敗作になるでしょう。だけど私が書いた本で『竹内好』よりもましな本もありますよ。夢野久作¹²⁾なんて一回も会ったことないんですから。『アメノウズメ伝』¹³⁾って本も書いてますが、天鈿

女なんて一遍も会ったことないです。だから、『竹内好』よりもうまくいっていますね。『丸山眞男』という本を一冊書けば、ほぼ確実に、私のメタ・メソッドとメソッドから言えば、失敗作になるでしょう。まあ、残り少ない年月だから、書かないほうが良いと。

で、民衆との関わり。これは微妙な問題があるんですね。丸山眞男に対抗する吉本隆明っているでしょう。民衆との近付き方、また取り上げ方が非常に違う。これは、メタ・メソッドとメソッドの問題なんです。でも、全然違うところから話してみましよう。丸山さんは一九四六年二月『思想の科学』の創刊準備会を開いた時からのメンバーなんです。同人は七人いたんですが。題名をどうするかってところとで、『丸山眞男が提案した題名は『思想史研究』っていうんですよ。ところが、同人の中でそれは一票しか取れないんです。武谷三男が出した題名は、『科学評論』っていうんだ。これも一票しか取れない。私が出した題名は『記号論研究』っていうんだ。これも一票しか取れない。私の一票。結局、行き詰まりになっちゃったんですよ。手詰まりですよ。で、外から入ってきた人間がね、「これどうですか」、これ同人外ですよ、ただ付き合ひのある人。上田辰之助っていう人なんです。トマス・アクイナスの研究者。「皆さんのやろうと思ってることを前から聞いていたけど、Art of Thinkingということがとても近い」と。「その近いところでScience of Thinkingっていうのはどうですか、日本語に直すと「思想の科学」だから」。上田辰之助っていう人はトマスの研究者で、「トマス・アクイナスの経済思想」という論文で博士に

なった人ですから、マルクス嫌いですよね。これは、マルクス・エンゲルスから来たっていう風に、大学の思想史はそういう風を書くんだ。それはもう、概念と引用から来るからそうなるんだ。困ったんですよ。大学っていうものは、で、それでねえ、全員賛成したんですよ。で、『思想の科学』っていうものはずっと続いたわけなんです。初めは、一万部出したら一万部全部売れたんだ。不思議なことですね。これを超える売れ行きは決まらないうと思つたらもう一遍あった。これは、『中央公論』が天皇制特集号っていうのを断裁破棄した時なんだ。それを自主刊行で会社を作つて出したら一万七千部売れたんですよ。ま、そのくらいですね。この二つなんです。一万部でスタートしたのが段々段々売れなくなっていくんです。これ、相当困つたんですよ。私が現場の責任者ですから。売れ行きを把握している。で、その頃は、新幹線ないですからね、夜行列車で京都と東京を通つたんですよ。現場の仕事をやつたんです。東京で、で、京都は京都大学で自分の食い扶持を稼いでいたんです。ま、その時の大学が呑気なものでねえ、一週間に金曜だけ出勤していればよかつたんです。それで、まあ、ある時、東京から京都に帰る夜行列車の中で、思いついたんですよ。今熱海の岩波別荘に丸山さん缶詰になっている。そこに行つて相談してみようと思つて、途中下車して、熱海で下りて、かなり夜も晩くなつていたんだけど、岩波別荘に行つて外からコンコンって窓を叩いたんだ。そしたら丸山さんが出てきてね。ちよつと話をしたんだ。私は、更に、乗り継いで後の汽車で京都まで帰つていくんですけども。

で、売れ行きが落ちてきて困っているんだっていう話をしたんですよ。そしたら丸山さんはね、真面目に聞いてくれてね、「それはね、全国各地に執筆者と読者がいるだろう、その人達を中心にして支部を作るんだ」。つまり、分権するんですよ。普通、大学で思想史やったら、丸山眞男の言うこととは思えないでしょう。だから私の証言は重大なんだ。私が嘘言ってるんじゃないんですよ。で、そんなこと言ったのは、同人の中でただ一人だけなんです。私はびっくりした。何年か遅れてそれは実行するんです。大阪とかね、徳島とかそういう所に支部ができるんです。だが、今、丸山眞男について話をしているんだから、問題はね、そういう発言が丸山さんから出てくるっていうことなんです。つまり、民衆の中から思想に関心を持って、思想史について何事かを書く人・読む人が出てくるということが丸山さんの視野の中に入っていたということなんです。だから、敗戦直後、私の大学なんかで、ものすごく力を入れるでしょう。三島まで行きますよ。あの情熱っていうのは大変なものです。丁度一九五〇年くらいだったと思えます(註6)。で、大学の思想史研究っていうのはね、重大な、最初の所で見落としがあるんですよ。例えばね、民衆なんて考えるところはアメリカ譲りだなんて考えるでしょう。実は、その時まで日本を一步も出てこない丸山眞男からそういう提案がでているんですよ。もう一つ、多元主義なんてあるでしょ。これは、最初出発した時の七人の同人の内、五人が留学生出身なんです。アメリカ留学生が四人、フランス留学生が一人、これは渡辺慧ですが、七人の同人の内五人が留学生だか

らそこから多元主義が出たんだろうと、まあ、概念として考えればそういう風に思っちゃってそういう風に書くんですよ。それは違うんです。史実として違います。多元主義っていうのをきちんと定着させたのはマルクス主義者である武谷三男なんです。この人も一步も日本を出ていないんですよ。その時まで。どういう風にかかって言うかね、初めにその、最初の会ですよ、七人しか同人がいないんだ。拒否権を編集会議で持たないようにしよう、同人の一人がこれは良い論文だと自信を持ってきたら、それは編集のプログラムの都合上で今度の号にいかせないとしたら、それは持って帰っても良いだろう。だけど、家に持って帰ってこの論文考えても、或いは、自分の知人で良い論文を書いたからこれを持ってきたという場合も、一遍は拒否されても、出なくても、もう一遍ゆっくり考えてみてこれはやっぱり良いっていう一遍持ってきたら、必ず通す、そういう風にしよう。これが最初からの約束なんです。編集の。で、この中に、既に、多元主義の原則っていうのが含まれてくる。論理的な系として、logical corollaryとして含まれているんですよ。ですから、それを、まあ六十年守ってきたね。もっとはっきり、守りきりたいですね。だから、マルクス主義……どこから武谷さん、そんなものを、そんな考えを持ってきたのかという、それは、戦争中に『世界文化』やっています。その時の経験からです。あれは、他のマルクス主義の雑誌みたいにコミンテルンの命令を受けて何かやるっていうんじゃないんです。コミンテルンはその存在を知っていて、使者を送ってきたんです。で、その使

者は京都に来たところで捕まっちゃったんですよ。小林って言うんだけど。牢獄にいて。その弁護を担当したのは滝川幸辰です。で、獄中死んでいます。だから、向こうは、人民戦線あるそうだから、それを自分の政治的な配下としておこうとしたんですが、『世界文化』は、短い期間だけでも、全く自由な、独自の人民戦線っていうものを構想して二年間編集を続けたんです。で、これは、武谷さんが共産党の命令に服さない雑誌が一つあっていいじゃないかという編集会議での発言につながり、この多元主義が編集原則の中に含まれているような提案をしたということと絡んでいるんです。ですから、アメリカ留学生が七人の内四人、フランス留学生が一人、五人で、日本の外に出なかった人が二人しかいなかったから、留学生から民衆の試作品を取ろうとか、多元主義で行こうというのが出ただろうとか言うのは全然大違い。一歩も出なかった二人から出ているんです、原則は。やっぱり、この、事実から出発しないとね。概念が大体こうなってるってんでこれを事実押し付けるっていうのは、事実生き物なんです。外へ出ますよ。そのことを分らないで研究してるの、困るね、全く。ハハハハ。もし私が三十二年前に大学辞めてなかったら、こんな楽々と大学の悪口は言えません。

で、丸山さんは、一等兵の時に、原爆の風炎で打たれます。原爆体験を持っていてる人ですね。しかし、このことを黙っています。公開での発言をしません。なぜか、なかなか難しい問題ですよ。この解釈は、一つ回り道から私は類推したいんです。水俣の会に行ったらば、私の

すぐ隣に宇井純が座っていたんです。で、宇井純が私に言うのに、雑談としてですね、水俣はカナダのグラスシーナローズと同じ構造を持つ被害を住民に与えているので、構造としてはつきりすることができて、日本国の一地方の事柄ではなくて、国際的な取り組みを誘発するようになった。水俣の公害よりもはるかに大きな原爆がどうしてそういう取り組みを作り出さなかったんだろうか。これは重大な発言ですよ。私は丸山さんに答えてもらいたいんだ。私の類推的発言は決して強力なものではありません。でも、私はこう考えます。あの時に、すぐ、政治運動と関わりができてしまつて、社会党系と共産党系。共産党系はソヴィエトが作る原爆ならば目的も立派だから、きれいな原爆・きれいな水爆ってこと言うでしょう。ここまで言ったんですよ。そうするとアメリカの目的で使った原爆は汚い原爆だ、こういう話になって、これでまた対立するような状態になる。つまり、党派の集団がこの問題をひっさらっていつてしまったんです。こういうことはあり得る。で、この党派の対立の中に原爆は置かれた。被害者もそのようにやりとりされた。丸山さんは敗戦直後から、「レーニンが『背教者カウツキー』などというレッテルを貼つたのは行き過ぎである。マルクス主義には倫理が欠けている。オールラウンドな思想体系ではない」。で、「この中でカント譲りの垂直の論理を入れたカウツキーは、その限りにおいて正しかった」。つまり、第一次世界大戦に対してドイツを支持するか支持しないかの問題を離れてそこにはそうした問題が残されている。で、マルクス主義の中に結局、その、歴史の言いなり

になっていく、権力の言いなりになる、倫理の欠落のためにね、そういう方向があれば、どこまで行くかっていうことの、やっぱりその弊害が出てくるんですよ。これが、敗戦直後から、恐らく、戦中、南原研究室で勉強していた頃から、そのことは明らかだったでしょう。このことと、原爆体験を自分の中に持ったまま、あれ、公開発言は随分後になってからですね、ということと関係はあるでしょう。政治的党派の大衆運動に利用されたくない、ということですね。

で、その、報道に高きを求めるといふことと非常に深い関係があるんですが、今の、道場の中で突き一本で倒されたっていう話を話しましたが、そうじゃなくてね、私の仕事はとても危ない仕事だと思っていたんですよ。丸山さんは、どこから危ないと思っていたかというところ『誤解する権利』^リっていつの書いた時からだな。葉書を書いて「人を相手にせず天を相手にして下さい」っていうの、葉書に出て来るんだ。だから、その天っていう問題ですね。これは武田清子さんの前の講演の中に、丸山さんの蔵書の中に『罪と罰』『悪霊』『カラマーゾフの兄弟』の中にある丸山さん自身の書き込みがあるのを武田さん見ているんですね。その中に、丸山さんの手で、「神無き人間の自由の荒涼たる世界」、これは丸山さんが私に言った言葉で言うとな、異端は重大である、しかし異端である時にはね、やがて自分のこの考えが正統の座を占めるといふ異端であるべきだ。ただ常になんか正統があると異端で御座いという風に横を向くのはいけない、これは私を戒めていった言葉で、『誤解する権利』の段階で危険を感じたんだと思うんだ。つま

り、神があらうがなかるうが、そういうことを超えてね、虚としての天ですね。神なき人間の自由の荒涼たる世界。神を措定しない、神がないとしてもですよ、措定しない、ただ自由にといふことの危うさ。目的なき意志、神を見失った自我、つまり、丸山さんは決してシュティルナーの考え方であったのではない。で、無神論にはある役割を認めているんですね。完全な無神論者は、完全な信仰に達する最後の一つ手前の段階に立つ。これは中世のパラケルスの逆の立場になりますね。パラケルススは神父の一人なんです、完全にキリスト教を信じた者には善行は不可能である、善き行いは不可能であるという逆説を出しているんですよ。それは、何か良いことをしたら必ず天国で報いがあるわけでしょう、死んだ後。だから、ご褒美目当ての話になるじゃないですか。だから、完全な信者にとってはもう善行は不可能という逆説を出しているんですよ。これと裏表のテーゼになりますね。で、やっぱりこの辺りが、虚であるとしてもという論理的な留保、だから、虚妄であるとしてもその虚妄なる戦後民主主義にかけるっていうのと非常に似ているでしょう。リアリズムというもの一本でいけば、ただの荒廃に達するという危険なのでしょう。で、最晩年のちよつと手前なんだ。丸山さんは半年くらい、その、大体、『誤解する権利』以来、眉唾つきで私に對していたと思うんだけど、毎日新聞かなんかにね、丸山さんを引用してなんか私が言ったようなことを書いた記者がいたんですよ。そういうゴシップの誤伝で伝わっていくのが非常に丸山さん嫌いなんだよね。長文の手紙を書いて私を弾劾してこられたん

です。私は、すぐに、電話をかけて、この毎日新聞の記者は会ったこともないし、私は直接に知りませんよって言ったんです。そしたらね、思い止まっちゃった。疑問は氷解しましたって撤回したんです。だから、私はね、これだけ長い弾劾の手紙を書いて来られたんだからと思つて、次の日あらゆる仕事をほっぽっておいで、朝一番で東京まで行つたんですよ。暮れにかかった。で、丸山さんの家に行つたんだ。そして、丸山さん出てきて、もう氷解したんだ、疑問はね、今日は家では大掃除やつてんだ。こういう日に訪ねてくるなんて君は貴族的で怪しからん、とか言うんだよね。そういう、貴族的で怪しからんというのは、丸山さん、私に対する偏見を持つてんだ。これはもうメタ・メソッドの方なんだ。だから、メタ・メソッドの方に絡まっちゃったんだ。メソッドと：そういうことがありました。だから、とにかくもう既に氷解したつていうわけ。しかし、家にも上げてもらつて大掃除の最中にちよつと雑談して帰つた。そういうこともありましたね。これは、今の、新聞記者が間に立つとどんなことが起こるか分からん、ゴシップの誤伝ですからね。だが、あいつは危険な人物だと『誤解する権利』以来、大変に、私に警戒心を持つていたことも事実だなあ。

で、まあ、丸山さんの嫌いなゴシップに少し踏み込んだりしたからもう一步踏み込んでみよう。竹内好きさんのお通夜の時に、大変な数の人があそこ詰めていたんですよ、そこで、藤田省三さんがいて、丸山さんを引っ張つてきて私の前に連れてくるんだよ。それでね、「私が丸山さんの家にはもう決して行かないということになったのは、鶴見さ

んの『誤解する権利』について討論してからですわね」って言うんだよね。まあ、藤田省三つていうのは相当気の立つている人物で、丸山さんはそうだよ。そうだよ。つて小さくなつていんだよね。もう。だから、今の、いやあ、藤田省三は相当気が狂つてゐるなあと、しかも、藤田省三は私を離さないんだ。その後、埴谷雄高がリーダーになつて、なんかパーに行つてねえ、藤田省三が私を捕まえていて、「今日はどうしても私の家に泊まつてください、泊まつてオレンジジュースを飲んで下さい」、私が酒飲まないのを知っているから、どうも参つたねえ。そして、やっぱり一緒に来ている谷川雁が、ぱつとねえ、私の手を取つて外に出して、あれ重役だから、自動車待たしているんですよ、それに乗せて私がつてある宿まで連れてつてくれたんで助かった。だから、私の評価から言えば、谷川は狂つたように見えるけれども藤田省三の方が狂つてゐるなあ。だけど、丸山さんは自分の中に熾おこのように狂つた部分を持つていましたよ。だから、自分がなんかの衝動で引つ張られて、こつ、狂いたくないんだよ。やっぱり、きちつと制御する。そこに丸山さんのメソッドがあつた。メタ・メソッド、メソッドの交錯。

ね。だから、もし、私が『丸山眞男』という一冊の本を書けば、うまくいくわけない。ハハハハ。とにかく正気に戻りましょう。そうすると、戦争中の一九四四年（昭和十九年）に丸山さんの人を知らず、あの「自然と作為」の論文全巻終わりまで読んで以来、私は丸山さんの影響を受けて、丸山さんの死後も、六十年に二年足らず、丸山さんの影響下にあります。私は私なりに丸山さんの影響を受けています。

註

講演の中で、鶴見先生の記憶違いではないかと思われる所が少しありました。講演の本すじにかかわるものではありませんが、語られた時代をよく理解するために、先生のご了解を得て、丸山自身が記すところを挙げます。また講演でふれられた鶴見先生の著作と他の仕事について詳しく知るために、a から j までの書誌的な註をつけました。(松沢弘陽)

1 一高二年生を終えた春休み、一九三三年四月、たまたま本郷通を歩いていて、「唯物論研究会創立第一回公開講演会」というピラが目にとまり、弁士として幼い頃からよく知っている長谷川如是閑の名があったので行って見ることにした。「如是閑さんと父と私」『丸山眞男集』第十六卷(以下『丸山集』一六のように略す)一七六一―一七七頁。

2 一九四四年七月、最初の応召直前に書き上げたのは、丸山が助教授になって四年後、「国民主義理論の形成」。この論文は「国民主義の「前期的」形成」と改題して、丸山の最初の本『日本政治思想史研究』(一九五二年)に収められた。「日本政治思想史研究」あとがき『丸山集』五、二九三頁。

3 津田左右吉を非常勤講師として東大法学部に招いたのは南原繁。「南原先生を師として」『丸山集』十、一八七―一八九頁。

4 『思想』一九五六年三月号、「思想の言葉」欄に丸山眞男の署名で書かれ、鶴見俊輔という名を挙げて「知識人の戦争責任」論文

の議論にふれている。

5 詳しくいうと、渋谷から東横線へいく、目黒区宮前町の、戦災を免れた妻の実家。一軒に三、四家族同居という状態だったから、書庫などはなかったのではないだろうか。

6 静岡県三島市の庶民大学三島教室、通称三島庶民大学。丸山は一九四五年一二月の発足から一九四六年末まで、熱心に通っていた。松沢・植手通有編『丸山眞男回顧談』(下)、岩波書店、二〇〇六年、九七頁以下。

a) 河合栄治郎編『学生と歴史』(日本評論社、一九四〇年)、「都合により一七五頁より二〇〇頁まで削除いたします」と、当該箇所
にあり。

b) 一九五六年一月。『鶴見俊輔著作集』第五卷に再録。

c) のち「戦争責任論の盲点」『丸山集』六

d) 「竹内日記を読む」『丸山集』一一一

e) 岡山麻子『竹内好の文学精神』論創社、二〇〇二年六月

f) 四方田犬彦『魯迅―めざめて人はどこへ行くか』プロンズ新社、一九九二年

g) 鶴見『竹内好―ある方法の伝記』リポレポート、一九九五年

h) 鶴見『夢野久作・迷宮の住人』リポレポート、一九八九年

i) 鶴見『アメノウズメ伝・神話からのびてくる道』平凡社、一九

九一年

j) 『誤解する権利―日本映画を見る』筑摩書房、一九五九年